

県内失語症患者らが友の会

言語聴覚士が継続支援 情報共有、社会参加促す

山梨県言語聴覚士会(内山重史会長)が、失語症者や家族、言語聴覚士らでつくる団体「失語症友の会『ふじやま』」を立ち上げ、県内全域での失語症者のネットワークづくりを進めている。日ごろ、他者とのコミュニケーションが不足しがちな当事者に集いの場を設けていて、症状改善につなげることを目指している。日本言語聴覚士協会によると、47都道府県にある言語聴覚士会のうち、失語症者や家族が集う団体を言語聴覚士が運営しているのは山梨だけ。同会は、言語聴覚士が運営を担うことで所属する医療機関を通じて、より多くの失語症者に参加を促せると期待する。

〈小林諒一〉

失語症 脳梗塞や脳出血などの脳血管障害によって大脳が損傷を受け、発症する。言語に関わる大脳中枢が損傷されることで、「聞く」「話す」「読む」「書く」機能が低下する。県言語聴覚士会などによると、失語症者は全国で約50万人、県内で約3500人いると推定されている。

失語症者のつどい(県失語症友の会連合会主催)への参加者と団体数は、1222人5団体(06年)から47人2団体(18年、失語症友の会「ふじやま」を除く)に減少。2団体は、県内全域ではなく特定の地域や系列の医療機関に通う患者らで構成されている。

「富士は日本一の山」。19日午後、甲斐・双葉ふれあい文化館の一室で開かれた、同会の第3回定例会。これまで友の会に参加していなかった失語症者12人が、童謡「ふじの山」を高らかに歌い上げた。食事を取りながら近況報告をしたり、福笑いを楽しんだりして交流を深める会員。失語症者と家族に笑顔の輪が広がった。

「聞いて」「読んで」「書いて」など、失語症者が困っている場面を想定した訓練に生かしていきたい(同会)という。

生きがいがづくり

「自宅や病院で過ごしながら失語症者が、友の会にくると表情が豊かになる」と内山会長。「言語聴覚士が関わることで失語症者の社会参加を促し、生きがいがづくりに貢献したい」と話している。

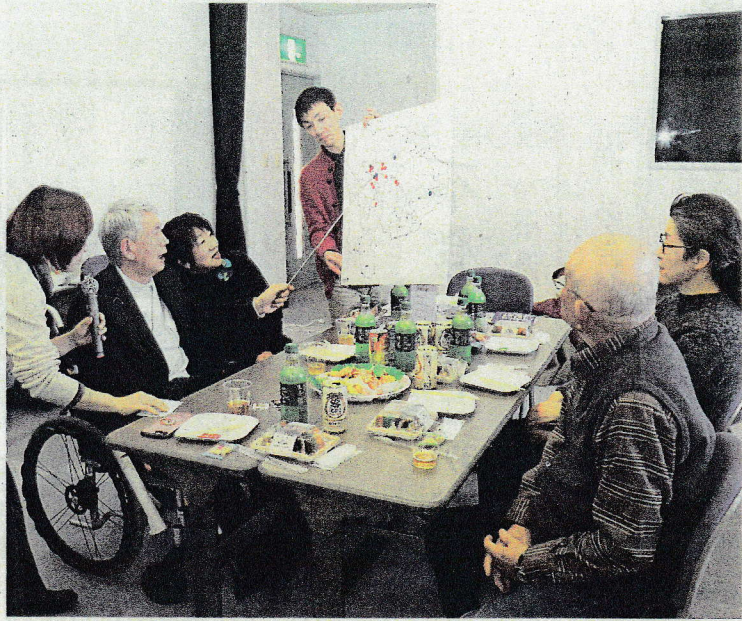
「同じ症状の人と出会えてうれしい。みんなと話すのは本当に楽しいね」。2017年2月ごろに脳出血

失語症者らが集う定例会で、自分が住む地域について話す会員。甲斐・双葉ふれあい文化館

支援方法を共有

県言語聴覚士会によると、友の会の会員が集う「山梨県

失語症友の会「ふじやま」は、今後も2カ月に1回定例会を開き、失語症者らの交流を深めていく。問い合わせは同会事務局(春日居サイバーナイフ・リハビリ病院言語聴覚療法科内)、電話0553(26)4126。



失語症者らが集う定例会で、自分が住む地域について話す会員。甲斐・双葉ふれあい文化館